モダリティとイントネーション

窪薗晴夫（国立国語研究所）

1.疑問とモダリティ

「モダリティ」という用語・概念の定義は研究者によって微妙に異なっており、どこまでをモダリティに含めるかも研究者によって異なっているようである。「話している内容（命題）に対する話し手の判断や感じ方を表す言語表現」（ウィキペディア）と解釈すると、疑問文もモダリティの範疇で論じることができる。本発表では日本語の中で「疑問」がどのようなプロソディー（イントネーション）で表されるかという問題を、鹿児島方言を例に考察してみる。

2.鹿児島方言の疑問文イントネーション

日本語において「疑問」は主に文末の文法要素（終助詞）とプロソディーによって表される。このうち文末プロソディーを見てみると、日本語には、疑問文を積極的な文末ピッチ上昇で表す方言と、積極的な文末ピッチ下降で表す方言の２つのグループに大別できる。前者は日本列島の中央（たとえば東京方言や近畿方言）に見られ、一方後者は日本列島の周辺部分（たとえば北東北、九州以南）に見られるようである。同じ「疑問」というモダリティが全く逆の音声特徴で表されることは、言語類型論的に見ても非常に興味深い。

諸方言の中でも鹿児島方言は、さまざまな意味・用法の疑問文を同じ言語形式で表すことができる。たとえば（1）のように一つの文が(a)~(d)の異なる文脈で用いられる。

（1）誰が来たか（ダイガ　キタカ）

a.　直接疑問文：誰が来た？

b.　間接疑問文：誰が来たか（私は知らない／知っている？...）

c.　反語疑問文：誰が来たというのだ。誰も来ていない／私は来ちゃいない。

d.　強調疑問文：（こんな時間に）いったい誰が来たんだ？

この方言において（1）の４つの異なる意味はプロソディーの違い（ピッチの上昇位置、下降位置および上昇の程度）によって区別される。ピッチ上昇を［ で、ピッチ下降を ］で、急激なピッチ上昇を［[でそれぞれ表すと、(1a-d)の違いは次のようになる。

（2）a.[ダイ]ガ　キ[タ]カ

b.[ダイ]ガ　キタ[カ…

c.[[ダイ]ガ　キタ]カ

d.[[ダイ]ガ　キタ[カ

本発表では Yes/No 疑問文（「誰か来たか？」）も含めて、各種疑問文がどのようなイントネーションパターンで生成されるか、逆の言い方をすると、プロソディーがモダリティの違いをどのように表すことができるかという問題を考察する。